



163号

2011/5/1

日中文化交流市民サークル'わんりい'  
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>  
Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)  
◆'わんりい'事務局の住所表記が上記になりました。

## 東日本大震災被災地の復興を心からお祈り申し上げます



中国で出会った尼僧 山西省五台县台懷鎮 (2001年7月) 撮影:田井光枝

### 'わんりい' 163号の主な目次

北京雑感 (54) 北京の合理性 .....	2
私が調べた諺&慣用句 (2) 「虎の威を借る狐」 .....	3
媛媛讲故事 (34) 怪異シリーズ② 杜子春2 .....	4
アジアを読む (76) 「中継されなかったバクダッド」 「従軍日記-イラク戦争・兵士と過ごした36日」 .....	6
私の四川省一人旅 (45) 理塘の街で⑥ 神の岩山と鳥葬の丘 Ⅲ .....	7
福建見聞録 (6) 中国で見かけた不思議な日本語2 .....	10
あさおサークル祭・わんりいのプログラム .....	11
アフリカとの出会い (52) 「ケニア式復活祭」 .....	12
スリランカ紹介 (47) スリランカの世界遺産⑨ ゴール .....	13
西安うろうろ歩き (1) .....	14
中国・城市(都市)めぐり (5) 大連市・再訪の旅 .....	16
アフリカ人から見た震災 .....	20
松本杏花さんの俳句集・千里同風より .....	21
'わんりい' 掲示板 .....	22

【表紙写真説明】中国山西省の五台山は、その昔 300 以上の寺が林立していたといわれ、中国仏教 4 大聖地の一つに数えられている。五台山中央の台懷鎮の周囲を 3000m を超える 5 山が囲み、それぞれ頂上が台状の草原になって寺が置かれていることが五台山の名前の由縁だそう。夏は山野草が咲き乱れ、ハイキングのルートもあるとのことで、山歩きを目的にわんりいのメンバーが 5 名で訪れた。

7月の台懷鎮は、盂蘭盆会のいろいろな廟会が開催される。五台山にはチベット仏教の寺院も多く、上の写真は、チベット系寺院の盂蘭盆会(右下写真)で出会った尼僧・二人である。

「阿弥陀仏」は、日本語で何というかわわれ、「アミダサマ」だと伝えると、廟会の間中、「アミダサマ、アミダサマ」と、節をつけて唱えていた。(田井)



今回の東日本大震災は、文字通り未曾有の災害でした。過去の地震や津波から教訓を得て、十分に用心しておられた地域の方々の備えと知識を遥かに越える力で、自然が牙をむいてきました。昔は新聞の記事と、3,4枚の写真で被害状況を知るばかりだったものが、今はテレビで、海水が押し寄せ、船が燃える火が水に浮かぶ様子を目の当たりにして、息をのみ、復興の難しさを思い、暗澹たる思いに囚われました。

しかし、世界各地からは、いち早く救援物資と共に、日本の復興を信じているとの暖かいはげましのメッセージが多く寄せられました。今までの日本の活動に対する世界各国の評価に、日本人として、ちょっと胸を張りたくなる気持ちです。最近のニュースでは、被災者の方々の復興への取り組みが伝えられており、「世界の評価は正しかったのだ」と、誇らしく思えるようになりました。

この災害で誘発された原子力発電所の事故に関しては、未だ予断を許さない状況で、被災者の方々のご苦労がしのべれます。こちらは放射能という目に見えないものが相手で、しかも今までに経験のない災害ですから大変です。

暫く前まで、テレビでは盛んに「原子力はクリーンなエネルギーです」というコマーシャルを流していました。私はこのコマーシャルが嫌いでした。感覚的に、放射能が残る使用済み燃料を、どう処理するか決めないで使うのはおかしいと思いました。処理の方法として、ガラスに閉じ込めて地中深く埋めるのだと言われても、地下のマグマにでも投入できない限り、それがどんなに深くても地球の中には違いないので、将来どんな影響があるか分からないのに、「クリーンなエネルギー」ではないだろうと本能的に感じたものでした。

とは言っても、これほど簡単にこんな重大な局面が到来するとは思いませんでした。今は、現代の英知を結集して、1日も早く危機的状況を脱して欲しいと祈るばかりです。火力発電のように排気で大気を汚染することも無く、水力発電のようにダムで自然を破壊することも無い原子力発電は、電力不足を解消する切り札と期待されたようですが、不勉強な私は、国内の原子力発電所がこんなに多いとは知りませんでした。

この事態を受けて世間では、行き過ぎた電力消費を見直そうとの気運が高まっています。時間を巻き戻した生活で、電力消費を控えようというアイデアもあるようです。これで電力不足が緩和されれば良いのですが、物事がそう単純でないことも十分承知しています。それでも、人々の意識がそういう方向に向かうのは必要なことだと考えます。

「時間を巻き戻した生活」と言うと、私はいつも初めて北京で生活するようになった頃を思い出します。21世紀が始まったばかりで、中国はまだ発展の緒に就いたばかりと言ってもいい状態で、街は埃っぽく、ちょっと雨が降ると水が車道に溢れて、歩道の敷石が凸凹していました。時々予告なしの停電があったりもしました。

当時の東京の生活と比べると、決して快適とはいえませんでした。私は、始めたばかりの北京生活を充分楽しみました。何を楽しんだかと言うと、食料品の「量り売り」です。当時の東京では、量り売りは殆ど見られなくなっていました。スーパーは勿論パック詰めですし、少しは残っている八百屋さんや魚屋さんも、多くは「一皿いくら」という売り方をしていました。

それが北京では、野菜や魚は勿論、お菓子もごま油さえも、搾りたてを量り売りしていました。値札は皆、「〇〇元1斤」、つまり「500gでいくら」です。そして、その売り方も、今我々が目指すべき無駄を出さない方法でした。野菜市場では、山のように積まれた中から、自分で好きなものを好きな数だけ選んで秤に乗せて、目方に応じた値段を払います。近所の八百屋さんでは、農家から卸売市場に届いた梱包(目の粗い竹の籠のようなもの)のまま店先に置いてあり、客が自分で選んで目方で買って行きます。

初めのうちはいい品が選べるのですが、時間が経つと、残っているのは曲がっていたり、千切れていたりするものも多くなって選ぶのが大変ですが、客は文句も言わずに良さそうなものを選んで買って行きます。形が悪いだけで、新鮮さは同じなのですから。商品が余り酷くなると、「1.4元だけど1元」とか「半額でいいよ」などと言って、売り尽くします。

日本では、まっすぐなキュウリを育てるために筒をはめたり、育ちすぎたキュウリは出荷をしないなどと言われますが、中国では、Cの字になったキュウリは勿論、中にはSの字になったものまで、ちゃんと商品になります。中国式の売り方は、無駄が無くていいですね。買う方も、自分が必要とする量を、用途によって太いの、細いの、大きい、小さいのと自由に選べます。大変合理的です。

昔は日本でも量り売りをしていたのに、スーパーマーケットが出来てからはパック詰めの商品が主流になり、量り売りは殆ど消えてしまいました。北京でこの量り売りに再会した時、北京では無くならないで欲しいと思ったのですが、どうやら北京も日本とおなじ道を歩み始めたようで、スーパーマーケットの人氣が高まると共に、街中の小売店や近くの便民店(極小さな雑貨屋さん)でさえもパック売りを始めました。本当にガッカリです。

## 私の調べた諺・慣用句②

# 虎の威を借る狐

三澤 統

今回も虎にまつわるお話ですが、皆さんの周りには、「私の父は、大企業の社長をやっています」、「私の友人には、有名私立大学を出た連中が沢山います」、「私の親戚は、医者ばかりです」、「私は政治家の何某を良く知っています」などと言いつらす人はいませんか。それでは、ご自分は何なの？と言いたいですね。

自分自身はたいした力も無いのに権力者などの威光を笠に着て偉そうに威張っている例は枚挙にいとまがありません。このような人は陰で「彼はまるで”虎の威を借る狐”だ」などと言われますが、‘知らぬは本人ばかりなり’かも知れません。

ところで、中国語にはそのものずばりを意味する四字熟語があります。

▲小学館 中日辞典を開けてみますと、

「狐假虎威 (hú jiǎ hǔ wēi) 虎の威を借る狐、権力者の威勢を笠に着る者のたとえ」

と載っています。ということで、今回は”虎の威を借る狐”の謂れをこの熟語から調べてみました。

この成語の出自は〈戦国策<sup>注</sup>〉。楚策一〉の次の部分です。

「狐曰“子随我后，观百兽之见我而敢不走乎？”兽见之皆走，虎不知兽畏己而走也，以为畏狐也」(狐曰く、「汝、我が後に従え、見よ百獣が我を見て敢えて走りざらんや。」獣これを見て皆走る。虎、獣の己を畏れて走るを知らざる也。以って狐を畏ると為す也)

楚の国を宣王が治めていた時、北方の諸国は楚国の将軍の昭奚恤(しょうけいじゆ)を大変怖れていました。宣王はそれがどうしてなのか理解できなくて、ある日大臣達に訳を聞いてみました。すると江一という名の大臣が宣王につきのような寓話を話しました。

昔、森に一匹の非常に獐猛な虎が居て、その森にすむ獣を次々に食べていました。

ある時、虎は一匹の狐を捕まえました。すると狡猾な狐は食べられては大変と思い、一計を立て、近寄りたいたい威厳に満ちた態度で厳かに虎に告げました。

「私は百獣の王として神から遣わされた者だ。お前が私を食べることは神の命令に背くことになるのだ」

そう言いながら虎の方を眼の端でちらっと見ると、虎はまだ信じていない様子なので、更に続けました。



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

「では、こうしよう。私がそのほうの前を歩いて行くからお前は後について来なさい。森の中の獣達で私を見て逃げ出さないものがあるか」

虎はそれも一理あると思い、狐の後をついて行きました。途中、森の中で彼ら(狐と虎)を見かけた獣たちはことごとく逃げ去りました。

実は、獣たちが逃げたのは本当は虎を恐れたのであって“百獣の王”を騙る狐を恐れて逃げたのではないということ虎は知りませんでした。

物語を話終えた江一は本題に入り、宣王に言いました。

「王様は今、五千里四方の地盤と百万の軍隊を擁していらっしやいます。これらの地盤と軍隊を皆昭将軍が管轄しているので北方の諸国は昭将軍を恐れていますが、実際に怖いのはあなたが彼に与えている軍隊なのであって、これは森の中の獣が虎を恐れているのと同じことなのでございます」

これを聞いて宣王はそういうことであつたのかとやっとな得がいったということです。

### 〈注記〉

戦国策(せんごくさく)は戦国時代の遊説の士の言説、国策、献策、その他の逸話を国別に編集し、まとめ上げた書物。もともと『国策』『国事』『事語』『短長』『長書』『修書』といった書物があつたが、これを前漢の劉向(紀元前77年～紀元前6年)が33篇の一つの書にまとめた。「戦国時代」という語はこの書に由来する。

ウィキペディア (Wikipedia) より

翌年、中元の日に杜子春は老人との約束通り「老君廟」の檜の木の下へ行きました。老人は「素晴らしい場所に案内してあげよう。どうだ行かないか」と杜子春を誘いました。杜子春は喜んで承知し、二人は華山の雲台峰に向かいました。

山に入って、20キロほど歩くと突然目の前に、清々しく、荘厳な雰囲気のある建物が目に見えて来ました。お寺のような建物で、美しい雲が高い屋根を覆い、鶴が周りを飛んでいます。どうやら普通の人間が住むところではないような雰囲気です。広い母屋の真ん中に、高さが2、3メートルもある大きな薬を練る為の炉が、紫色の炎を放ち、家の窓や玄関を明々と照らしています。その炉の周りには仙女らしい九人の女性が立ち並び、青龍、白虎が炉の前後に控えています。

時は、夕方近くで、老人は黄色い冠を被り、紅い上着を着た道士<sup>1)</sup>の姿になりました。老人は、実をいえば元々道士だったのです。道士は白い石のような丸薬三粒とお酒をなみなみと満した杯を持ってきて、杜子春にすぐに飲むように言いました。杜子春が言われた通り丸薬を口にしてお酒を飲み干すと、今度は虎の皮を家の西の壁ぎわに敷き、杜子春に東向きに坐らせて次のように命じました。

「何を見ても絶対に声を出してはいけない。たとえ神、悪鬼、夜叉、猛獣が目の前に現れても、たとえ恐ろしい地獄の責苦に苦しんでいる親や兄弟等の姿が見えてもそれは一切真実ではない。身体を動かさず、絶対に声を出してもいけない。わしのこの言葉をしっかり守りなさい！そうすれば、お前は仙人としてわたしたちの仲間入りができるのだ」

それだけ言うと道士は去って行きました。杜子春は坐ったまま、周りを見回してみました。庭には、水がなみなみと溢えられた大きな甕が置いてあり、それ以外にもありません。

いろいろ不思議に思っていると、突然ごうごうとやかましい音があたりいっばいに響き渡り、軍旗を掲げ、矛と槍を持った大軍が、山や谷を埋め尽くして目の前に押し寄せてきました。其の中に、自分自身も、自分が跨る馬も金で飾り立てた、一際背丈が高い偉丈夫が数百人の衛士を率いて現れ「我こそ將軍なり」と名乗りを上げました。衛士達はみんな弓に矢を番え、杜子春に向かって進んできます。

「お前は何か？ なんで逃げようとしなのか？」

將軍は杜子春に訊ねました。杜子春は道士との約束がありますので固く口を閉じたままでした。將軍は口を開かない杜子春に腹を立てたようで「殺すぞ！」と轟くような大声で怒鳴り、杜子春に斬り掛かったり、矢を射かけたりしました。それでも全く反応しない杜子春に業を煮やした將軍は為す術なくそのまま引き返しました。杜子春は、これで息が付けるかとほっとしたのも束の間、どこからかまた猛虎、獅子、毒蛇、蝮、毒竜などが何万匹も現れ、一斉に先を争って

杜子春の体や頭をとこと構わず噛みつき始めました。しかし杜子春はじっと静かに瞑想を続けていました。しばらくすると全てのものが退陣して行きました。

しかし今度は、バケツをひっくり返すような豪雨が降り注いできました。雷は山を切り崩すかのような激しさで轟き、稲光は天を裂いて閃き、杜子春の回りに火柱が何本も立ったかのように見えました。そしてあっという間に深さ一丈<sup>2)</sup>あまりになるかと思われる水量が庭先まで押し寄せ、杜子春が瞑想を続けているところに届くかのように思われました。それでも杜子春は少しも怯まず相変わらず静かに瞑目して坐ったままでした。

すると先程の將軍が再びやって来ました。今度は牛頭の悪魔のような連中を引き連れ、煮え立つお湯が入った大釜を杜子春の前に据えました。

長い槍や、さすまたなどの兵器を持った兵士が杜子春の周りを囲み、其の中の一人が「將軍の命令だ。名前を言えばすぐ解放してやる。さもなくば、このさすまたで胸を刺し心臓を取り出し、釜で煮るのだ！」と告げました。それでも杜子春は全く怯む様子を見せません。

すると今度は杜子春の妻を庭先に引きずり出して来させると將軍は「名前を言えば、彼女を放してやろう！」といいました。しかし杜子春は相変わらず口を閉じてなにも答えずとはしませんでした。妻は鞭でひどく打たれ、矢で射られ、槍で突かれ、火で焼かれ、お湯で煮られ、体は血まみれになり、その苦しいような様子はとても見ていられないほどです。

妻は苦しみのあまり我慢できなくなり口を開きました。

「私は顔も奇麗だとはいえないし、手先も器用ではない。あなたに相応しい良い妻ではないかもしれません。しかし、あなたの妻として十年あまりもお仕えしました。今鬼に捕えられて様々な責苦を受け、もう耐えることができません。鬼達に跪いて拜んで下さいとは申しません。しかしたった一言、ご自分のお名前を告げて下されば、私を救ってくださることができるのです。人は情けを持つといわれています。どうしてあなたは、たった一言をそんなに惜しむのですか？」と泣きながら、杜子春に訴えました。しかし、杜子春はまるでなにも見ていない様子で動じませんでした。

將軍は更に言いました。

「お前がまだ黙っているなら、私はお前の妻にもっとひどいことをやってみせよう」

やすりを持って来させると部下に命じて、妻の足を少しずつ削り始めました。妻は痛さに身を悶えて、激しく泣き叫びましたが、杜子春は黙したままでした。

「こいつは既に妖術に惑わされている。この世にそのまま置いては害をなすことになろう」

將軍は部下に命じ、杜子春を斬らせました。

斬り殺された杜子春の魂は閻魔大王の前に引き出されました。

「こいつが雲台峰の妖怪なのか」

と閻魔大王が言いました。杜子春は地獄に連れて行かれ、熱く焼かれた銅の柱を抱かされ、鉄の棒で打たれ、ひき白で碾かれ、石臼で搗かれ、火に投げ込まれ、煮立った油の鍋に入れられ、刀の山を歩かされ、劍の木に登らせられ…、などなどありとあらゆる地獄の責苦を受けました。しかし、杜子春は道士の言葉をしっかり心に念じ、なにもかもひたすら耐えて、言葉を発することはありませんでした。

とうとう地獄の獄卒も為す術なく閻魔大王に杜子春の様子を詳しく報告しました。

「こいつは陰の気を受けているやつだ。男にして置いてはよくない。女として、宋州の単父県(山東省)知事の王勤の家に生まれ変わらせよう」

閻魔大王がこのように決断した結果、杜子春は王勤の娘として生まれ変わるようになりました。しかし、杜子春の生まれ変わりであるこの女の子は生まれつき体が弱く、次から次へと病気に罹り、針、灸、薬、医者との縁が途切れることがあります。その上、火に落ちて火傷をしたり、寝床から転落したりというような事も続いたのですがそれでも声を上げることは全くありませんでした。

歳月が経ち女の子はようやく奇麗な娘に成長しました。しかし、言葉を発しないので軽蔑する人やわざと嫌がらせをしてからかう人もいましたが、どんなに悔しい時も彼女は何も言わず黙ったままでした。

同郷に盧珪という進士<sup>3)</sup>が彼女の美しさを伝え聞いて妻にしたいと申し入れて来ましたが、両親は彼女は話ができないからと首を縦に振りませんでした。けれども盧珪は「美しく性格の良いひとなら夫婦に言葉などは必要ありません。是非私の妻になって頂きたいのです」と心を籠めて自分の気持ちを彼女の両親に訴えました。両親は「そのようにまでおっしゃってくださるなら私達も安心です」と縁談を纏めることにし、盧珪は六礼<sup>4)</sup>を用意して彼女を妻としました。

夫婦となった二人は仲睦まじく幸せな日々を送り、数年後、賢く可愛い男の子に恵まれました。男の子が二歳になったある日、盧珪は子供を抱いて、妻に話しかけました。しかし、妻からの返事はありませんでした。盧珪は何とか妻の返事が欲しいと思い、色々と試みてみましたがどうしても彼女の返事を引き出すことができません。盧珪は返事を貰えない苛立ちから少しずつ怒りを募らせてゆきました。

「昔、賈大夫<sup>5)</sup>の妻は大変な美人だったので、容貌の醜い夫を軽蔑して口を開かず笑わなかった。しかし、その夫が雉を見事に矢で射落したのを見て、其の才能を認め、わだかまりを解いて仲の良い夫婦になったというではないか。私は、雉を射るのでは賈大夫に及ばないかもしれないが学問では

引けを取らぬ。どうしてなにも話してくれないのか？ それほどまでにお前が私を軽蔑しているというのなら、二人の間に息子がいても何の役には立たぬ！」

盧珪は話しているうちに更に興奮し怒りに我を忘れ、遂に子供の両足を掴むと、ま逆さまに石に投げつけました。子供の頭は割れ、その血が周りに飛び散りました。彼女は我が子を愛する心と我が子に加えられた残酷な仕打ちに耐えられず、ここに至って道士との約束を忘れ、遂に「あつ」と叫び声を上げてしまいました。

杜子春は自分が発した声に驚いて正気に戻りました。周りを見ると、杜子春は最初に道士に座っているように命じられたところにまだ座っており、その道士も杜子春の前にいます。時刻は未明のようです。

「そうだ、先程迄のことは全部真実ではないのだ」

杜子春がそう気が付くや、突然寺院風の建物の屋根の上から紫の炎が走り瞬く間に周りは火の海となり、見る見るうちに建物全て焼け落ちてしまったのでした。

「お前！ この貧乏人め！ なんという迷惑なことをしてかしてくれるのか！」

道士は憤懣やるかたなく大声で怒鳴り散らし、杜子春の髪の毛を掴んで頭を水の入った甕に押し込むと、火は忽ち消えたのでした。

「お前は、喜、怒、哀、楽、恐、悪、欲などを忘れることができた。が、愛を忘れることができなかった。子供が投げ殺された時にお前が声を出さえしなかったら、私の薬は完成し、お前も仙人になり天に昇れたものを。ああ、仙人になることはなんと難しいことだ。薬はもう一度作り直すことは可能だが、お前はやはり俗世界に戻らなければいけないようだ。これからは勤勉に生きなさい」

道士は杜子春に告げて帰り道を示しました。杜子春は焼け崩れた建物に上って、母屋を見ると、薬を作る炉は既に壊され、炉の真ん中に一本の太く高い鉄の柱があり、服を脱いだ道士が刀で其の柱を削っていました。

杜子春は家に戻りました。しかし、道士が命じたことを守れなかったことが悔しくてたまりませんでした。再び道士のところに戻って、一生懸命仕えて、自分の犯した過ちを謝罪したいと再び雲台峰に行ってみました。しかし、道士どころか、お寺の跡も見つけることはできず、悔しい気持ちを抱いて家に帰るしかありませんでした。(この項終)

#### ● 注釈

- 1) 道士：中国本土の宗教である道教を信奉する人。
- 2) 丈：長さの単位、一丈は約3.3メートル。
- 3) 進士：昔、中国の官吏登用試験の一つで、それに合格した人。
- 4) 六礼：昔中国で婚姻関係を結ぶ時に行う六つの礼儀作法。
- 5) 賈大夫：大夫は昔の官吏の身分。賈大夫は、史書の「春秋左氏伝」に登場した人物。

中継されなかったバグダッド

山本美香著／小学館(2003年7月発行)

従軍日誌 イラク戦争・兵士と過ごした36日

今泉浩美著／日本テレビ放送網(2003年7月発行)

年齢も近く、同じ女性記者としてイラク戦争に関わった二人の著者の、それぞれの本を読んだ。

今泉浩美さん。従軍記者として、米軍とイラク戦争の36日間を共にした。

山本美香さん。戦争が始まる3日前にバグダッドに到着し、フセイン像倒壊の日を迎えた。ちなみに、その日を、今泉さんは「バグダッドが陥落した」と書き、山本さんは「けたたましいキャタピラの音が、バグダッドの町にとどろいた」と書いている。

今泉さんの本に、山本さんの名前が出てくる。山本さんが滞在していたホテルが米軍に攻撃された日だ。山本さんの隣の部屋に滞在していた記者やカメラマンが死亡。山本さんは、顔見知りの死を、なすこともなく見送った。死んだのは自分だったかもしれないという実感を持って。そして、言い切る。「これが米軍の本性だった。(中略)やはり、米軍は私たちメディアを攻撃したのだ。アメリカの提供した、管理した従軍取材以外のジャーナリスト活動は認めない。攻撃の対象になっても仕方がない。それが彼らの考えなのだ」。一方、そのニュースを聞いた今泉さんは、「加害者の一人になったようで、すごく後味が悪い」という気持ちに襲われ、従軍している部隊の攻撃ではなかったか必死で確認する。「米軍がジャーナリストがいるホテルを狙ったりするのだろうか…」という疑問を抱いて。

今泉さんは、とても正直だ。アメリカの攻撃に立会いながら、「この砲弾の着弾点では間違いなく人

が傷ついているはずなのに、悲しいことに相手の顔が見えないというのは『命の重さ』を体で実感できない」と。攻撃された国にいた山本さんは、5ヶ月の

赤ん坊を亡くした家族や、全身に破片のささった子どもを見守る母親のうつろな目を前に、「戦争に協力している人たちは、一度ここに来て見てみればいいだろう」と言う。

今泉さんが取材したアメリカ兵の多くは、大学の奨学金を得るため、家族を養うため、家を買うために、志願して兵隊になった。彼らも戦いたくない。けれど、除隊はできない。契約期間中に除隊すると、一生の汚点として記録に残る。そのため除隊できずに、自殺する兵士も多いという。彼らはこの戦争が終わらないと家に帰れない。だから、この戦争を「ROAD TO HOME(家路)」と表現する。しかし、攻撃された人たちは「HOME」そのものを奪われた。

2冊を読み比べて思うことは、山本さんの立場に身を置かないと、見えないことがある、ということだ。山本さんは仕事の原点に、雲仙普賢岳の噴火被害の取材を挙げている。駆け出しの記者だった山本さんは、当初、旅館に寝泊りしていたが、あるときから避難所で生活を始めた。眠れない、毒虫に刺される…そこで初め

て被災者の生活を体で知り、「他人事」が「自分のこと」になる。

必要なのはこの姿勢である。

(真中智子)



遊牧民のテントに別れを告げた私は街を目指して徒歩で帰った。車でもそう遠くない印象だったが、道路を外れ草原を横切るようにして歩くと思いの外すぐに街外れの住宅街まで辿り着き、照りつける日差しが暑くて堪らないのを除けば然程の苦勞なく街の中心まで戻ることが出来た。

朝から何も食べていなかったのも、お腹が空いてフラフラだ。飲食店がある通りまで来ると最初に見つけた店に飛び込んだ。店は空いていてお客は私の他に学生の様に見える若い青年が二人だけだった。頼んだ汁麵を待っていると、隣のテーブルで向かいに座っていた青年が「日本人ですか？」と話しかけてきた。とてもハンサムな若者だ。チベット人といえば一般的には穏やかな丸顔の、一昔前の日本人のような顔立ちのイメージがあるが、このカム地方の男達は彫りが深く顔立ちの整ったキリっとした男前が多い。青年の涼やかな眼差しには、太陽の照りつける草原を歩いてきた疲れが癒される思いだったが、この時は彼等と話しながらも見る事が出来なかった鳥葬の事が気になって仕方なかった。見知らぬハンサム青年との話題としては如何なものかとも思えたが、さりげなく鳥葬について尋ねてみると、快く受け答えしてくれる青年の話では葬儀は必ずしも早朝に行われる訳ではなく昼過ぎから始まる事もあるのだという。

あれ程「今日だ」と言いきっていた運転手の言葉を思うと、それでは昨日出あった人達の葬儀も今日の午後に行われるのだろうか？とも思えてくる。先に食事を終えていた青年達が店を出て行ってしまうと、私は一人で汁麵を食べながら何となく釈然としない思いだった。

食事を終えて店を出た私はまだ青年の言葉が心に引っかかっていたが、汗を流して歩いてきた道を再び引き返す気持ちにはなれず、通り沿いの洋服屋などをひやかしながら宿泊している宿に向かって歩き始めた。

街で一番整備の進んでいる地区と思われる辺りの道路脇には、ガラスのショーウィンドーを構え今時風な洋服を扱うお洒落な店も数軒あり、まるで時代を飛び越えて別世界に紛れ込んでしまったような理塘の街にも、やはり近代化の波が押し寄せている事を感じさせる。

思えば今回先に訪れていた康定でも、三年前には全く見られなかったそんな店が沢山軒を連ねていた事に驚きを感じたのだった。旅行者の勝手な感傷だとは判っているが、下界から隔絶された天空の楽園のように思っていた理塘も、あと数年後には確実にこの様な店が立ち並び普通の街に変貌を遂げていくのだろうと思うと悲しい気

分だった。

自分の泊まっている宿に帰つた私は、遊牧民のテントを訪れた興奮の後の虚脱感と、見る事が出来なかった鳥葬の落胆とで少し気が抜けてしまった。部屋のベッドの上にドサッと横になり天井を眺めながら考える。もし、私にもっとたくさん時間があるのなら、このまま鳥葬が行われるのを何日でも待ち、気の済むまで理塘に留まっている事もできるだろう。だが旅の始めに成都で延長した一ヶ月の旅行ビザの期限は一日一日と迫っていた。それに加えて手持ちの中国元もジワジワと残り少なくなっている。この旅を終え成都に戻るまでに日本円を追加両替できる機会はないだろう。理塘を出て康定に戻っても、私にはまだ成都に向かう前にどうしても訪れておきたい土地が残っていた。もう残り少ない時間の中で、旅はあとどれくらい続けられるのか・・・その事を思うと気持ちの中に焦りが生まれていた。然程大きくもない理塘の街はこの2日間で何度も歩き回っていたし、鳥葬の事を除けばこれ以上この街にとどまっても何をして過したら良いのか思いつかなかった。

「明日理塘を出よう。」グズグズと思い悩んでいるのが面倒になった私は心を決めた。既に何度も足を運んでいるバスターミナルに向かい、窓口で明朝発の康定行き切符が欲しいとサービス員に告げた。ところがサービス員の答えは、明日の切符は既に完売だと言うのだ。予想外の事にショックを隠せない私が、それでは明後日の切符を購入したいと申し出ると、切符は前日にしか発売しないので明日出直して来いという話だ。迷った挙句に出発を決意してバスターミナルまでやってきた私の落胆は大きかった。出発を心に決めた時点で、滞在の意味が失われたように思っていた街で、残り少ない貴重な旅の一日を無駄にしなければならぬ事が心を重くした。

まず、今日をこれからをどう過ごすか・・・特に行くあても無い私の頭の中でしきりに青年の言葉が思い返される。先ほど歩いてきた感覚では鳥葬場はそう遠くない。散歩のつもりで再び訪れるのも悪くないと思えた。街の中で特にやることも思いつかない私の足は、結局再び鳥葬場を目指して歩き出していた。

これまで毎回タクシーで通り過ぎていた道を徒歩で歩いてみたのは悪くなかった。先ほどは疲れと空腹であり楽しむ余裕が無かった道のりが、改めてのんびり歩いてみると、民家の様子やそこで暮らす人々の姿がゆっくり眺められて新鮮だった。

街外れに土を盛り上げて小高い塚になっている場所があ

り、その上には仏塔が立てられていた。そこに登るとこれまで歩いてきた理塘の街並が一望できた。反対側に目を向ければ鳥葬場の方まで広がる草原が見渡せる。

そこから眺められる鳥葬場には人の姿は無く、やはり何事も起こっていなかった。特に期待もしていなかった私は然程に失望する事も無く、暫しの間そこに留まりいつものように「もし自分がこの街の住人だったら・・・」という空想に浸った。

私にとって特別な世界に思えるこの街でも、そこに暮らす事が日常である人達がいる。そんな当たり前の事が不思議に思われる。せつかく此処まで来たのだからもう一度あの場所に行ってみようと再び鳥葬場に向かって歩き始めたところで、三人の子供が私の後を追ってきた。見ればまだ幼い子供達なのに生意気なしぐさで煙草を吸いながら歩いている。

「何処に行くの？」

一番年長と思われる男の子が声をかけて来た。

「あそこに行くの」

鳥葬場を指差して見せると

「あそこへ行ってはいけないよ」

と男の子は言った。

「何で？」

と問いかける私に

「だってあそこは死人(しびと)の場所だから」

と男の子は答えた。

「大丈夫よ。一緒に行きましょう」

と私が誘うと、外国人が珍しいのか、遊び相手が欲しかったのか少年達も私と一緒に歩きだした。年齢を尋ねると一番年長の子が10歳であとの二人は7歳と8歳だという。

「ダメじゃない。子供なのに煙草なんか吸って」

と私がたしなめると、子供達は少し恥ずかしそうに笑顔を浮かべて持っていた煙草を地面に捨てた。生意気そうに見えたが意外に素直で可愛い。いよいよ鳥葬場まで近づくと子供達はちょっぴり緊張しているようだった。

「大丈夫？ 怖くないの？」

とおっかなびっくり尋ねてくる彼等に笑いながら、

「昼間だからお化けなんて出ないわよ」

と私は笑って答えながら先に立ってずんずん歩いた。

鳥葬場の丘の麓には、コンクリートの小さな建物が一つ建っていた。一見、日本の公衆トイレのような感じの建物だ。昨日運転手と訪れた時にあれは何かと尋ねると、葬儀の時に雨が降っていたりした場合、遺族がそこで葬儀が終わるのを待つのだという話だった。

「あそこに行って見ましょうよ」

私は前日もそこに立ち寄っていたので、中に何も無いのは知っていたのだが、何となくもう一度その場所の様子を確かめたくて建物に向かった。すると私達が建物の前に近づいたその時、バーン!!!・・・と、誰もいないはずの建物の中から何かを激しく打ち付けるような音が響いてきてギョっとした。只でさえビクビクしていた子供達は驚きと恐怖で身体を硬直させ顔を引きつらせている。見れば建物の中に取り付けられていた木製のドアが風に煽られて開いていた。

「大丈夫、ドアが風に吹かれて開いただけだよ」

私が子供達を諭し、4人が更に建物に近づいたその瞬間、バーン!!!更に大きな音を立てドアが壁に打ち付けられた。空気が凍りついた次の瞬間、うわ～～～っ!!!子供達は声を上げながら一目散に逃げ出した。先頭に立っていた私は逃げ遅れ、「きゃああ～～～!! 待ってよお～～！」と声を上げると一番年長の子が私を振り返り、足は駆け足のままバタバタさせながらもその場に立ち止まって、後ろ手に私の方に手を伸ばすと「早く！早くっ！」と叫び声を上げた。

私は必死に男の子に駆け寄ると彼の手を握り、二人で手を繋いだまま前を駆けて行く子供達の後を追って一心にその場から離れようと走った。

子供達と足をもつれさせながら走って、走って、息が切れるまで走ったところで、一同は草原に崩れ落ち、ハアハアと胸を押えていたのが納まると自然にみんな笑い出してしまった。

「ああ～～怖かったねえ～」皆と口々に言いながら、あれ程お化けは怖くないと言い切っていた自分が、その時は本当に焦ってしまったのが可笑しかった。それにしてもあの音は何だったんだろう。ドアが風に煽られただけとは判っていても、その時はドアを壁に叩き付ける程の強い風など吹いていなかった。

日頃迷信やオカルトの類には興味無い私だが、その時は本当に目に見えない何か「ここに来てはダメだ！」と怒っているように感じられてしまったのだ。怖くないはずの私さえ一瞬恐怖を感じた位なのだから、元々ビクビクしていた子供達はどれほど怖かったのだろう。それにしても・・・そんな状況で私を気遣い、手を差し伸べて待っていてくれた男の子にはちょっぴり感動してしまった。やっぱりカムパの男は子供でも男らしくてカッコイイ。年長の子の肩を抱き、彼にお礼を言いながら他の二人に

「あんた達は自分ばかり逃げて酷いわ！」

とからかうと、残された二人がモジモジしながら、

「だって怖かったんだもん・・・」

とバツが悪そうにしているのが可愛い。



すっかり仲良しになった私達は草原をそぞろ歩きながら遊んだ。一人の子が草原に咲いている可愛い花を摘んで渡してくれる。相手がいくつだろうと男性に花をプレゼントされるのは嬉しいものだ。

「うわぁ～！ ありがとう!!」と受け取り、「日本まで持って帰るネ」と本に挟んで押し花にして見せると他の二人が僕も、僕もと花を取って来てくれる。まるで人気者の小学校の先生みたいにモテモテだ。お礼にみんなに折り紙を折ってあげると、子供達は代わりに石を削って作ったペンダントヘッドのような物をくれた。まるで古代の古墳から出土したアクセサリみたいだ。「これどうしたの?」と聞くと、拾った石を自分達で研いで作ったのだという。何処のお土産物屋で売られている物より素敵なプレゼントがとても嬉しかった。

それにしても子供に縁のある日だ。思えば朝からずっと子供達と遊んで過した一日だった。バスのチケットが買えなかった事で一瞬沈んだ気分になってしまったのが嘘みたいに、やっぱり理塘は最高だぁ～って気持ちになっていた。これまでも何度も感じた事だが、やはり旅とは出会いなのだ。どれだけ素敵な出会いがあったかがその旅がどれだけ良いものになるかを決めるのだと思う。土地の人と気持ちの通じる触れ合いがあればあるだけ、その土地が好きになっていく。

子供達の家がある住宅街まで戻ると、走り回って遊ぶですっかり喉が渇いてしまった私はジュースを飲んで喉を潤し、子供達には楽しい時間を過ごさせて貰ったお礼にアイスをご馳走してお別れした。

宿に戻ると出直して再び温泉に行った。標高の高い理塘の気候は湿度が低く乾燥していて、毎日お風呂に入らなくては過せないほど不快でもない。中国元の残金を気にしながらやり繰りしている私が、宿泊代と同じ金額のタクシー代を使って温泉に行くのは贅沢だと思うが、この幸せだけは手放したくない。

いい気分で温泉から戻ってきて宿に入ろうとしたところで、中から出てきた中年の男性にすれ違いざま声をかけられた。

「あんた日本人? 一緒に飯喰いに行きまへんか?」

突然の関西弁に驚いて顔を上げると、おじさんの後ろにはもう一人若い男性が立っていた。鍾乳洞の岩山に行く前に私が誘おうとして声をかけそびれた青年だ。日本語の会話に飢えていた私は勿論喜んで仲間に入れてもらった。青年の知ってる店に案内してもらい、お奨めの美味しい麺を食べながらそれぞれの旅の話に花を咲かせる。私が岩山に行くのに誘いそびれた話をすると、彼の方では私に気付いていなかったらしく、それは是非行き

たかったと残念がっていた。残念なのは私も一緒だ。昨日の岩山詣出に仲間が増えていたら、きっと楽しかった事だろう。この関西おじさんの様に何の躊躇もなく声をかければ良かったのかと、ちょっぴり後悔もしたが、昨日のうちに彼と行動を共にしていたら、きっとその後の展開も大きく変わっていただろう。今日が特別に楽しく過せた事を思えば、それはそれで良かったのかもしれない。

成都を出て以来久しぶりに同じ感覚を共有できる日本人同士で、思い切り日本語の会話ができるのはとても楽しかった。それは、それぞれが一人旅を続けていた関西おじさんと青年の方でも同じだったようで、軽い軽食を扱っていたその店が夕方で閉店すると、このまま本格的な夕食になだれ込もうと店を変え、食事が済んでも話は弾み続けた。夏休みを利用した長期旅行をしているという学生の彼はともかく、この関西のおじさんは面白い人だった。

特に中国が好きでなくても無く、中国語なんて全く話せないという中年のおじさんが、こんな奥地まで一人で来る事自体が珍しく思えたが、その風貌もかなりユニークだ。小太りでメガネをかけ、短いズボンに女性用のストッキングをハサミで切った物を太股までの長靴下として履いている。私達がそれを指摘すると「これがあったかくて、重宝なんですわ～!」と熱弁していた。関西弁特有の軽妙な語り口で、これまで訪れた国の現地女性との色っぽいエピソードなども面白可笑しく語るおじさんに私と青年は大笑いだ。

青年が話してくれた、宿で相部屋になっているフランス人旅行者の話も凄かった。私は共同の洗面所などで顔を合わせ、彼が発散しているオーラに只者ではないエネルギーを感じていたが、その彼は自転車で中国を旅していて、この理塘までも自力で自転車をこいでやって来たのだという。何度も繰り返してしまうが理塘は標高が4千メートルを越える高地にある街だ。街と街の距離は遠く、何処までも広がる大草原と辺り一面瓦礫しかない砂漠の様な土地を、車でさえ長い長い道のりを走り続け、酸素が薄い為に車のエンジンさえ悲鳴を上げそうな峠を越えなければ辿り着く事はできない。その日の天候により気温の寒暖の差は激しく、この季節でも小雪の舞う日さえある。そんな場所を自転車でやって来るには人間離れした鉄人の肉体が無ければなし得ない事だ。

面白い土地には面白い人間が集まってくる。そんな旅人達の話の聞けるのも僻地と呼ばれる土地に旅する楽しみの一つだ。いつまでも尽きない旅の話に3日目の理塘の夜は更けていった。

(続く)

前回、街で見かけたおかしな日本語を紹介しましたが、もう少し見ていきたいと思います。

中国の街中では英語に比べると、日本語で書かれた看板や宣伝の類はまだ大変少ないです。その上、日本語の表示も日本語としておかしなものが多いです。これは日本語の普及が英語に比べ歴史が浅いことに関係があるでしょう。

以下は、私が中国の街を歩いて見つけた、日本語としておかしい看板の表示です。

**【写真1】** これは福州市内のあるファッション関係の商店の店先に張られていたポスターです。日本語で「春の減」と書かれています。その下に英語で“Spring Blossom Sale”と書かれているので、すぐ分かりますね。しかし、英語がなかったら、何のことか分からないですね。ただ、「減」は「減価」とすれば、一応分かります。これは「春のセール」のことです。ついでに、下に「1件9折」、「2件8折」と出ていますが、中国語で「折」は「…掛け」を表しますので、9折は「9掛けで売りますよ」という事です。従って、前者は「1枚で10%オフ」、後者は「2枚で20%オフ」のことです。

**【写真2】** このような看板を中国各地でよく目にしますが、これは杭州で見かけた看板です。日本語で「大人のおもちせ玩具」と書かれています。「おもちせ」は「おもちゃ」のことと想像できますから、いわゆるポルノ・ショップのことですね。最近、中国のどこに行っても、特に大都市ではSEX SHOPを見かけるようになりました。香港に行くと、「ポルノ関係」というような看板も目にします。この看板で、もうひとつ面白いと感じたのは英語の表記です。“SEX-HEALF HPROCDFG”とありますが、これは正しい英語でしょうか。考えるにこれは恐らく、“SEX-HEALTH PRODUCT”ではないでしょうか。こういうものを見つけれられるのが中国ならではの街歩きの面白さです。なかなか興味深いです。

**【写真3】** これは上海市内で見かけた美容院の看板(料金表)です。たくさんの項目が英語で書かれていて、その下に



【写真1】

TARIFF	
Shampoo シャンプー	RMB 20
blow shampoo シャンプー & ブロー	RMB 40
shampoo cut シャンプー & カット	
shampoo blow cut シャンプー & カット & ブロー	RMB 78
perm パーマ (カール)	RMB 280 end
colour ペーマ	RMB 260 end
highlight ポイントカラー	RMB 280 end
treatment トリートメント	RMB 280 end
nail ネイルサロン	RMB 30
director of design デザイナー	RMB 188
Reservation 62489592	

【写真3】



【写真2】

日本語、右隣に料金があります。日本語を見ていると、一体どんなことをするのか分からないものばかりです。女性ならばお分かりになるのでしょうか。例えば、「ロヤンプ(シャンプー?)&カット&ロー」はお分かりになりますか。英語で“shampoo blow cut”とあります。これならば何となく分かります。では、「カラーリウ(カウセンウシャンプーウロー込)」は如何ですか。これには英語で“perm”とありますが、次の“color”と間違えているのではないのでしょうか。“C olor”には「ペーマ(パーマ)」と書かれていますので、明らかに間違えています。「トノートメント」は「ト

リートメント」でしょうね。“Director of design”に「デザイナー」と書かれています。これはどんなものなのでしょうか。私には全く分かりません。いやはや不思議な日本語のオンパレードです。この店には日本人の客が来るのでしょうか。

気を付けて見れば、不思議な日本語は中国の街の至る所で見掛けます。中国に行かれた際はご自分の目で確かめてみては如何でしょうか。きっと楽しいいろいろな発見があることでしょう。

乞う！ご期待！！あさおサークル祭・わんりいのプログラム！！

於：麻生市民館 5月28日(土)及び29日(日)  
小田急線新百合ヶ丘下車・北口徒歩3分(麻生区総合庁舎裏)

全て参加無料

①アンデスの民族楽器・ケーナの演奏 演奏：山下孝之

✳5月28日(土) 10:30～11:30 於：視聴覚室 定員：30名

昨年と一昨年と、東京万馬-馬頭琴アンサンブル演奏会で一緒に演奏した、アンデスの民族楽器・ケーナの演奏が好評でした。演奏の山下孝之さんのご協力で、ケーナの音色をたっぷり聞ける時間を用意しました。哀愁のあるアンデスの民族音楽「コンドルは飛んで行く」などの他、季節の曲や童謡、山下さん作曲の自然をテーマにしたオリジナル曲を加えて演奏頂きます。満席でも30名の視聴覚室での演奏です。じっくり演奏に浸って下さい。

◆演奏とケーナについてのお話し：山下孝之

②TOKYO万馬-馬頭琴アンサンブル/演奏会

✳5月28日(土) 15:30～17:00 於：大会議室

馬頭琴の本場・中国内蒙古自治区やモンゴル共和国で数度にわたって演奏し、絶賛を浴びるまでに力をつけたTOKYO万馬/馬頭琴アンサンブルの演奏です。毎年、麻生サークル祭に参加して、人の声に近いという馬頭琴の音色に魅せられた多くのファンがおり、毎回盛会です。是非、ご家族やお友達、お揃いで楽しみください。

◆出演：西郷美炎子(コンサートマスター) 高木和恵 永瀬正博(団長) 池谷禎俊

③ドキュメンタリー映画「ミンガー ヤンガー サンワー」(監督：丹羽朋子)上映とお話し

～中国は、陝西省北部に広がる黄土高原のヤオトン暮らしと民間芸術～

✳5月29日(日) 14:00～16:00 於：視聴覚室 定員：30名

◆お話し：丹羽朋子(東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍)

昨年6月に上映しましたが、もう一度、見たいというリクエストがあるなど好評でしたので再上映します。

まだ、ご覧になられていらっしゃらない皆さん、チャンスです。

丹羽朋子さんは現在、中国・延安周辺の陝北地域の農村に住み、中国黄土高原地帯の剪紙を中心とした民間芸術と民俗文化について調査しています。現地の‘わが家族’である毛さん一家の暮らしをご自身がまとめた映像で、中国陝北地域の農村生活や、そこに息づく民間芸術についてご紹介頂きます。

■わんりい主催の、全ての問合せ&申込み ☎042-734-5100 ‘わんりい’

4月のケニアは、キリスト教徒(ローマ・カトリック、プロテスタント、その他)にとっては重要な宗教的な行事のある月です。

それは、「復活祭」です。十字架にかけられたイエス・キリストが3日後に、復活したことをお祝いする日です。ケニアのキリスト教は、最初はヨーロッパの冒険者たちによってもたらされました。その後植民地時代、宗主国のイギリスから宣教師が派遣され、彼らの布教の成果で今や伝統宗教に取って代わり国民の7割とも言われる国教になっています。キリスト教会はもちろん、キリスト教に基づいたカリキュラムの小学校・高等学校はいたるところにあります。おそらくイエスやマリア様を知らない人はケニアにはいないでしょう。

私がケニアにいた2001年4月の復活祭は、こんな風に始まりました。

朝10時頃、首都ナイロビにあるHoly Family Cathedral Basilicaというカトリックの教会に友人と一緒に行きました。この教会の建物はとても大きくて、日頃から日曜のミサの参拝者も多く、ミサは数回に分けて開催されています。政治家や有名人の参加も多く、私の滞在時にはケニアの大統領選挙戦があったので

すが、その時の大臣有力候補なども現れて、家族と一緒に心静かに賛美歌を歌う姿が印象的でした。

さて、到着してまず、教会のテーブルに置いてある「やしの葉」を手に取ります。それを2枚取って、手のひらサイズの十字架を作ります。用意が出来たら、それを持って、旗のように振りながら、街中を練り歩く「イースターパレード」がスタートです。1000人以上の人が賛美歌を歌いながら、ナイロビの町をぞろぞろと歩きます。老若男女、歌に心を込めて歩きます。ナイロビには、他にイスラム教徒や、ヒンズー教徒、伝統宗教を信じる人達もおり、その意味でナイロビはいろいろな宗教が混在する町でもあるのです。沿道の人、手を振ってその行列を眺めます。

ナイロビの町を1時間くらい歩き、教会に戻り復活祭のミサが始まります。この教会はカトリック教会なので、世界中どの国のミサに行っても、式次第は同じで、どの賛美歌を歌い、どの聖書の節を読むかは決まっています。厳粛なムードの中、英語でミサが行われます。1時間ほどのミサを終え外に出ると、すでに次のミサの出席者が大勢待っています。

その後は、家族や親しい友人たちが集まり、「復活祭」を祝う昼食の始まりです。

私は、近所の親しい家族の家へお邪魔しました。私が到着すると、女性たちが台所で野菜を切ったり、炒めたりと忙しい様子ですが、おしゃべりと笑い声は絶えません。男性は、外で、メイン食材のオスの七面鳥を解体中です。絞めるときに「キュウ」という声がありました。細いナイフ一本で、器用にさばっていきます。あっという間にきれいな塊となって、炭焼きにされました。煙がもくもくと立ち上がり、香ばしく肉の焼ける匂いがしてきます。

復活祭のパーティ料理の担当は女性たちですが、沢山の野菜と肉の下準備に2～3時間もかかりました。そんな訳で「昼食」のはずが、用意が出来上がる頃には、「夕食」の時間になっていました。でもこれはよくあることなので、私は家を出る前に昼食を取ってから出かけてきました。

お客さんが次々にやって来ますが、後で聞いてみると、実は誰も招いていなく、しかも誰も招かれてもいませんでした。どうも「招かれた」のは私だけだったみたいです。親しい人同士、自発的に集まり、自発的に用意しているお祝いの宴だったのです。

道理で始まる時間も決まっていなければ、終わる時間もありません。

どうせ休日、慌てることはありません。7時ごろになり辺りが暗くなってきました。灯油ランプを幾つか灯して、家の主人の奥さんのお祈りが始まります。その後は、飲んで、食べて、おしゃべりして、イエスの復活をお祝いします。人が出たり入ったりで、気が付けば50名くらい参加しています。しかも薄暗い灯りなので、私が誰としゃべったかは声による記憶が頼りです。

私が外国の暮らしで知った「復活祭」のお祝いは、イースターエッグを作って隠して探したり、ウサギの絵を描いて飾ったりということでした。ケニアでは、ミサの後、人が集まってご馳走を食べる。そしてその中心に「祈り」がありました。イースターを飾るものは、何もないといえるかも知れません。しかし、こうして日々「感謝して過ごすこと忘れない心」を、そしてそれをみんなで「共有する心」を、ケニアのグローバル化する経済の中にあっても、大切に思う社会であることが私にはとても好ましいものを感じられました。



## シンハラージャ森林保護区

今回はスリランカで唯一の自然遺産として1988年にユネスコに登録されている、「シンハラージャ森林保護区」を紹介します。

シンハラージャ森林保護区(以下、保護区)はスリランカの南西部の深いジャングルの中にあります。コロンボからは宝石の街として有名なラトゥナブラを經由して約125km、バスを2度乗り継いで約4時間30分の場所にあるクダワという小さな町が保護区の入り口になります。4時間30分にはバスを待つ時間は含まれないので実際には一日がかりの移動になります。

バスの待ち時間を過ごす方法として、最初の乗り継ぎ地のラトゥナブラでは宝石博物館を見学したり、外国人を見かけるとすかさず寄って来る宝石の露天商を冷やかして時間を潰す事が出来ます。もちろん、ちゃんと店を構えた宝石店もたくさん有るので、宝石を購入する際には何軒か訪ねて比較して下さい。往路で品定めをし、復路で購入するのが良いでしょう。何故って、保護区内では冷静に購入するか否か考える時間がタプリーあるからです。

宝石の露天掘りも見学可能ですが、場所は町から離れているので採掘地を見学したい時にはラトゥナブラで一泊するのがお勧めです。観光客相手に宝石掘りの実演を見せている採掘地もあり、ここでは露天掘りの体験をする事もできます。体験が出来る様な採掘地は道路から見える場所にあるし、採掘人が手招きしたりするのですぐに判ります。大概の場所では、採掘人の愛想が良すぎて胡散臭く、予め仕掛けてあった原石を体験者があたかも掘り出した様みせかけて、売りつけられる事があるので注意して下さい。

次の乗り継ぎ地のカラワアナは小さな町なので、特に有名な物はありませんが、スリランカの田舎町の雰囲気堪能する事が出来ます。必要な物はラトゥナブラのマーケットで購入した方が良いでしょう。保護区にはレジ袋等のプラスチック製品は持ち込めないので購入したら、他の入れ物に移し替えて下さい。もちろん保護区内で発生したゴミ類は各自が持ち帰る事は言うまでもありません。

クダワには保護区の管理事務所と併設の宿泊施設があります。保護区に入るには先ず管理事務所まで入場登録をすると共に入場料(US\$50)を支払います。但し、管理事務所では登録をするだけで、保護区に入場する

には事前にコロンボ近郊のスリージャヤワルダナブラコッテにある森林保護局で入場と宿泊の許可を取らなくてはなりません。この長い地名はスリランカの行政上の首都で、クイズ番組などで世界一長い首都名として出題されるのでご存知の方もいらっしゃるでしょう。

保護区の面積は88km<sup>2</sup>に及び、年間雨量が5000mmに達するスリランカに残された最後の原生熱帯雨林です。保護区内には絶滅危惧種に指定されているスリランカヒョウ、最近では少なくなった野生のスリランカ象やインドニシキヘビの他にも多くの固有種の動植物が生きています。現在(09年現在)固有種としては鳥類が142種、昆虫類43種、淡水魚53種、植物は約500種(ランだけでも50種)が確認されていますが、まだまだ未発見の固有種があると言われています。

珍しいランや蝶、昆虫が多く見られるので世界各国からたくさんの愛好家が訪れるそうです。僕は日本からの友人を送って、管理事務所の前までは行った事がありますが、その時は時間が無くて保護区に入る事が出来ず、その後もチャンスが無いままに帰国してしまった事が残念です。友人や保護区に入った事がある人から聞いた話では、高温多湿でムシムシしている上にヒルやら蛇がたくさんいて、なかなか大変なところのようです。

でも、見た事も無いようなランを間近で見れたり、大小色とりどりの蝶が舞っているのをみると苦勞のし甲斐があったという事でした。ガイドさんに頼めば日帰りトレッキングも出来るそうなので、仏教遺跡等の文化遺産だけでなくシンハラージャ森林保護区を訪ねてスリランカの原生熱帯雨林を楽しむのも一興ですね。

保護区内は動植物にとっては楽園なのですが、ご多分に漏れずスリランカでも保護区境界線の外側の原生林が無許可で伐採開墾されて茶やゴムの農園に姿を変えている事や、保護区内での違法な焼畑と宝石の採掘が、悪影響を与えて環境破壊が進んでいます。このために保護区内の貴重な動植物の生存が危機に晒されているのが現状です。

野生の象が保護区から外に出て農園を襲う事も頻発し、農民が野生象によって殺されたり、野生象が殺されたりしています。何とか共存できないものかと考えさせられます。今回で世界遺産シリーズを終了します。

6回シリーズで黄土高原の旅を連載された有為楠さんからバトンタッチされて、勘違いが多く思い込みの強い私が西安でのことを書く…?! 半年以上も前のことを思い出せるだろうか…? 有為楠さん曰く、「何かひとつ印象に残ったことがあると、それが糸口になって次々と思いついてくるものよ」。そう言う旅行中の彼女、全くといっていいほどメモなど取っていなかった。それなのにあんなにすらすらと文章になってでてくる。頭の中の記憶の引出しがきつと特別なのだろう。

本題に入ろう。西安には3泊したのに、私たち3名(西安に戻った後、Mさんは一足先に帰国した)はバスと徒歩で市内をうろうろあるき回っただけで、通常西安に来たら必ず訪れるはずの、郊外の兵馬俑や華清池や秦の始皇帝陵などは行かずじまだった。Wさんは以前に何回か西安に来ているので郊外の観光地はほとんど訪れているからまあ良しとしても、有為楠さんは中国

で何年も生活しているのに西安は初めてだという。それでも今回は私の強い希望で、郊外の観光は次回ということにして、バスで市内を廻ることにしてもらった。

甘泉を朝7:30に出発したバスは12:00ちょうどに西安東長距離バスターミナルに到着した。1週間前に慌ただしく延安行のバスに乗り込んだのもここからだったのだろうか…? 記憶にない。バスを降りてすぐにMさんが、西安のホテルやチケットをお願いしてあった王さん(旅行社の人)に電話した。繋がらない。

真夏の太陽が真上から照りつけてジリジリ焼けるように暑い。汗がふきでる。大きなトランクやザックを持っている移動はたいへんだ。おなかも空いてきた。まずは腹ごしらえと近くで見つけたレストランに入った。昼時なのでかなり混んでいたが運よくテーブルに着くことができ、周りを見まわしながらとうもろこしスープと青菜ときのこと・トマトと卵の炒め物などを注文して、ちょっと一息。

その間もMさんは何回も王さんに電話をかけた。彼は、私たち3人よりも5日前に中国に入り上海万博を観て、

北京で私たちと合流し、一緒に黄土高原をあるいてきたのだが、明日の朝にはもう帰国することになっている。

やっと電話が通じた。西安賓館まで行ってそこのロビーで王さんと会うことになった。彼女の職場はそのホテルの前だという。西安賓館という名前は聞いたことがあった。1982・3年頃、旅行社が募集したツアーで初めて中国(北京・西安)に行ったときに泊まったホテルだ。その当時の西安賓館は周囲をぐるりとフェンスで廻らし、宿泊者以外はホテルの敷地内に入ることができなかつた。

フェンスの外から物売りが土産品を買わないかと声をかける。そんな風景が見られた。ホテルの前の大通りは街灯もほとんどなく夜は外出しなかったと思う。25年以上も前のことだからきっと大きく様変わりしているだろうとちょっと楽しみになった。

タクシーで西安賓館まで行くことにした。これから向かうホテルは城壁南門の外側に位置する。タク

シーに乗ったのは城壁東門の外側だから、城壁の中は通らずに外側をぐるりと廻ってタクシーは進む。30分ほどでホテルに着いたが、どこをどう通ったのかは全くわからない。

長安路に面したホテルはもちろんフェンスなどはなく、タクシーはホテルの玄関前にぴたりと横付けになった。よれよれの服、汚れた靴、埃だらけのザックやトランク、そんな4人をホテルの従業員は笑顔で(?)迎え入れてくれた。「ここに泊まるのではないのです、ここで待ち合わせをしています。」という怪訝な顔をしたが、普通に対応してくれた。だっ広いロビーだが隅のティールーム以外は座るところがない。私たちはティールームと反対側の隅に荷物を運び、そこからMさんが王さんに電話すると10分ほどして若い女性が現れた。

王さんは会議中なので彼女が私たちをオフィスに案内するという。とりあえず大きな荷物をホテルのフロントに預かってもらって外に出た。オフィスは通りを渡ったすぐ目と鼻の先にあるのだが、車がひっきりなしに通る片



西安市内を走るバス(南門付近) (撮影: 渡辺栄子)

側3車線の信号機のない大通り(長安路)を横断するのは一苦勞。それほど交通量の少ない黄土高原から1週間ぶりに大都会に戻ってきたのでなおさらだ。案内役の若い女性にくっついてやっと渡りきったときにはじっとり汗をかいていた。

私は必死で道を渡ることだけしか頭になかったが、そんなときに有為楠さんは、何と若い女性の日本語の間違った使い方をていねいに訂正してあげていたのだ。その女性は私たちを呼ぶのに2人称の代名詞として「おまえたち…」を何度も繰返して使っていたのだ。通じるのだから、まあ、いいかあ～…なんて軽く考えていた私だったが、さすが有為楠さんは偉いなあ～と感心した。

長安路を渡ったすぐ前の建物のガラス張りのドアを押して中に入った。1階全部が旅行社なのかどうかは定かではなかったが、入ってすぐのところのソファで王さんの会議が終わるのを待った。しばらくして「お待ちせました」と王さんが外のドアから現れた。きれいな日本語を話す人だ。それから私たちはもう一度外に出て裏に回り同じ建物だが違うドアから入った一室に案内された。そこが彼女のオフィスのようだ。事務机が4個あって私たち4人が入るとそれでいっぱいという感じだ。男性社員がひとりいたがすぐに出かけてしまった。先程私たちを案内してくれた若い女性もお茶を入れてくれるといつの間にかいなくなった。

私たちと話している間にも何度も電話のベルが鳴り王さんはかなり忙しそうだ。王さんには、Mさんの明日の航空券・私たち3人の4日後の北京までの寝台車のきっぷ・今夜のホテルを依頼してあった。ホテルはMさんに便利な空港近くを予約していたが、私たち3人はそちらをキャンセルしてすぐ前の西安賓館に3泊できるようにお願いした。すべてOK。清算を済ませてバウチャーをもらって外に出た。

まだ日は高いし暑い。とりあえず西安賓館に預けてある荷物を受け取って、私たち3人はチェックインしようということになった。また命がけで長安路を越えなければならない。緊張する。ちょうどバスから降りてホテル側に渡ろうとしている人の横に並んで同じ歩調で歩いた。信号のない道路を横断するコツがちょっとわかった。なるべく誰かと一緒に渡ること。右から車が来ているときは一緒に歩く人の左側に立ち、中央分離帯で右側に移動する。歩くペースは常に一定。途中で走ったりしてはいけない。

チェックインして、Mさんの荷物も取り敢えず5階の私たちの部屋に運んだ。廊下の窓から小雁塔が見える。一休みしてから南門あたりまで歩いてみようかと外出した。ホテルから南門まで2kmもないのでゆっくり歩い

ても30分くらいだ。途中、月餅木型を売っている店がないかと2～3軒のぞいてみたが見当たらなかった。月餅木型を買うことも西安での目的のひとつだった。南門までたどり着いたが、暑さのせいかどっと疲れた。引き帰して、王さんにおしえていただいたレストラン・咪咪餃子店で夕飯を食べようということになった。ところが行ってみるときょうは臨時休業。近くでは他にレストランが見当たらず、しばらくうろうろ歩き回り、大通りから少し入ったところでやっと小さな食堂をみつけて入った。薄暗いし客は私たちだけ。ビールを飲んだことは覚えているが、何を食べたのか忘れてしまった。1週間一緒に黄土高原を旅してきたMさんとの別れの食事にしてはお粗末だった。

Mさんは夕闇せまる中、タクシーで彼の今夜の宿の空港近くのホテルに向かった。彼は翌朝上海経由で帰国する。

Mさんを見送って部屋に戻った。エクストラベッドを入れてもらって、今夜から3泊する。入浴し洗濯もした。旅慣れたWさんが洗濯綱を部屋の端から端に張ってくれた。ポタポタ水の垂れる洗濯物をバスタオルの間に挟んで水気を取っていると、彼女が横から「そんなんじゃダメ!」と広げたバスタオルの上に濡れた洗濯物を並べてクルクルとバスタオルを巻き、その上にお尻のせて上からドンドンと全体重を掛けた。おかげで洗濯物は翌朝にはほとんど乾いていた。

明日は午前中にバスで大雁塔と陝西歴史博物館に行こうと話し合った。

**‘わりい’ 会員の皆様**  
そして入会をご希望される皆様へ  
毎年4月から新年度になります。  
おたより会費の納入をよろしくお願ひします。  
年会費：1500円 入会金なし  
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本にいらっしゃってる方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わりい’を発行し、情報の交換に努めています。入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

## 〈はじめに〉

私は大連市にある「大連日通」で総経理として2年間勤務し、2009年6月末退任し帰国した。まださほど時はたっていないが、大連はとても懐かしい。そして「大連」という言葉の響きが好きである。何がそんなに懐かしいのかと問われて答えるのは難しい。それは街の匂い、大地の匂いというようなものであろうか。その懐しの大連へ3月6日から12日まで旅行した。日記として一週間を綴ってみた。

## ◆第1日目……3月6日(日)

昨年の尖閣列島問題等で、日中関係が今も必ずしも良好とはいえない中で、6日の昼すぎに大連周水子空港に着陸。何か影響があるかと思っていたが、税関もスムーズに通過した。飛行機から降りて税関に向かう時、大連空港の持つ独特の懐かしい匂いで、「大連にようやく着いた」と実感した。

荷物を受け取り出口に向かうと友人が背のびして手を振っていて、1年ぶりの再会を喜んだ。タクシー乗り場に向くと70～80人くらいの列ができています。めずらしいほどきちんと皆不満も言わず整列してタクシーを待っている。よく見ると殆どタクシーが来ないのである。昨年も同じ飛行場に到着し、すぐタクシーに乗れたのに、「何かあったの?」と友人に聞くと、「等一下」と言って走り去った。少したってから、すぐ来いと手招きする。指さす方向に行くと、1年も洗車していないような15人乗りのマイクロバスにすぐ乗れと言うので急いで乗り込んだ。1人20元だと言っていたが、おそらく白タクに似たものと思った。

途中各所で残雪を見た。私がいた2年間ではこんなに積もっているのを見たことがない。寒いので粉雪しか降らず、しかも風の強い街なのでいつのまにか吹きとばされて積る雪はみたことがなかったのである。聞くと、2月末頃かなり降ったという。今日は「啓蟄」であるが、これでは当分虫も地中から出て来られまい。

タクシーに乗りかえ、8元払って(大連は初乗り8元)ようやく大連国際酒店に着いた。このホテルは人民路のそばにあり、公寓式酒店である。つまりマンション式のホテルである。従ってレストランはない。安くて小ぎれいだけがとりえといったところである。朝食は適当にホテル樓の快客(中国式コンビニ)に行行って買って部屋で食べてくれということであった。

快客で翌朝の食材を求めたあと、近くの伝統工芸品店に顔を出した。旧知の老板(オーナー)はとても喜んでくれて、お茶やおつまみを出してもてなしてくれた。そして数ヶ月

前にすぐ近くにスナックを始めたので見てくれという。店内はうす暗かったが、老板は若いだけに多種多様な商売をやってみようであった。彼は絵描きで、彼の描いたタテ1mヨコ4mの額に入った「万里の長城」は、私が勤めていた会社(以下大連日通と略す)の食堂の壁に掛かっている。

夕方は日本人の友人とやきとり屋に行った。勧められるままに松竹梅でほろ酔い気分となった。異国の地で飲む日本酒もいいものと思った。

## ◆第2日目……3月7日(月)

朝9時に大連日通の運転手がホテルに迎えに来てくれた。上背がありサッカーがとて上手とのことである。大連市はサッカーが盛んである。大連日通にもサッカー部があり、会社のある大連経済技術開発区の大会で何度も優勝している名門チームである。

開発区は、市内から30kmの距離がある。行く途中至る所でマンションの工事をしており、1年前に来た時にはなかった建物が忽然と建っている。その工事の速さに基礎工事はしっかりやっているのか、鉄筋は決められた本数だけ入っているのかと心配になる。大連は地震のない所だと皆言っているが、1976年に発生した唐山地震の時は揺れたと年配の中国人は言っていたと記憶する。

彼は日本語をある程度話せる。が、私の中国語会話の練習相手として到着までお付き合い願った。道路脇には、この時期ともなればそろそろレンギョウに似た黄色い花をつける迎春花という低木が花を咲かせはじめる筈だ。大連の春はこの花が咲きはじめる頃に到来するが、今年はずぼみさえはつきりしない。今年の冬は例年になく寒かったためらしい。

私の後任の総経理は、大連勤務は通算で9年目と大連を知り尽くしているひとである。私の中国語も、せめて5年も滞在できればかなり上達したであろうと思うと残念である。総経理に挨拶し、事務所や現場をまわり、一人一人と握手した。皆、昔のままで温かく迎えてくれ、今年も来てよかったなと思う。そして構内にある小さな花壇の石碑をじっと見る。この石は開発区にある標高600m強の大黒山のふもとから運んだ石である。

大黒山の標高は低いがとても目立つ美しい山で、晴れた日には市内からも遠望できる。石碑は高さ1.5米幅1米くらいの大きな石であるが、表面に「天道酬勤」(ティエンダオチョウチン)と言う文字が刻んである。私が総経理の時、ある人に「それを見るときっかり仕事をしなければ」と思うような四文字の熟語はないかと尋ねると、一週間後に「この四文字がいい。中国人なら誰でも知っている言葉だ」



と教えてくれたのだ。そして2009年2月の会社創立18周年記念日に除幕式を行った。社員の精神的支柱にと立てたものだ。

この会社で私は1年半余り日本語教室を開いた。社員の要望があり昼休みに週2回行った。若干の出入りはあったが20数名の生徒が勉強した。

夜はこの日本語教室の生徒たちといっしょに火鍋料理に舌鼓を打った。冬の大連は何と言ってもこの料理がおいしい。都合で会社を退職した人も来てくれ17名の生徒と当時の思い出話に花が咲き時のたつのを忘れた。皆心から私や家族の健康を気遣ってくれ本当にうれしく思った。いつまでもこの交流の場が続くよう願ってやまない。

### ◆第3日目……3月8日(火)

今日は、「婦女節」。国際婦人デーである。これは1910年に女性の地位向上のため提唱されたが、中国で婦女節を取り入れたのは、おそらく1949年の建国以降であろう。この日は企業の多くは女性だけ休日としたり、午後から休みとしている。つまり女性のためだけの日だ。

中国では「婦女能頂半边天」といい、つまり女性が天の半分を支えるという諺がある。さすれば残り半分を支えるのは男性だし、男女平等が建前の国であるから「男人節」もあってよさそうだが。デパートやスーパーも女性の衣類やアクセサリなど大バーゲンセールである。男はおよびでない。

仕方ないので、カメラ片手に市内をブラブラする。まず1年間住んでいた人民路にあるシャングリラホテルの近くを散策した。というのは人民路とほぼ並行して海寄りに長江路が走っており、この通りの両側は以前は古い建物が多く、人民路の華やかさと対照的にうらさびしい通りであった。これらの古い建物群を最近取り壊しはじめていたと聞いたので、その様子を知りたかったのである。

シャングリラホテルのそばを歩いて行くと向こうに赤茶けたレンガがうずたかく積まれている！当時よく食べに行った日本料理店や土産物店など跡形もなくなっていた。本当に爆撃を受けた後の廃墟のようで、心が沈んでい

くのを感じた。工事中であったニューワールドホテルがその威容を主張するかのように建っていた。

中国という国は土地は所有権は認められていないため、都市計画が承認されたら、あっという間に道路ができたり、建物が壊されたりする。中国は城壁に囲まれた都市が昔は沢山あって歴史を感じさせたものだが、その多くはいとも簡単に壊されてしまっている。



記念碑

大連市内は今あちこちでいろいろな工事を実施しており、なんとなくほこりっぽい。市内には同時に2路線の地下鉄工事を行っている。行く先々で青色のトタン(?)製の工事用の養生がしてある。私が大連にいたころは、大連は岩盤の上にあるので地下鉄などできるわけがないという声をよく耳にしたが、現実には違った。遣り逐げる意思と技術があるからできるのであろう。2013年には完成する予定である。また市内から旅順まで快速電車を走らせるための工事がだいぶ進んでいた。これも2年後には開通するのではないだろうか。



変貌する大連市

昼は近くの「蟹漁師家」という日本レストランに入った。ここの店長の陳さんとは顔馴染みで大いに歓迎してくれ、いつものように杏仁豆腐を食後にサービスで出してくれた。

この店は、私がシャングリラホテル(別棟の公寓)に入居した当初、休日に散歩していると、どこかで見覚えのある看板が目に入った。

この店は本店が青山にあるが、町田市の私の家から車で10分くらいの所に横浜青葉店があり、家族で時折食べに行っていた店だったので。見覚えがあるはずである。アラスカやカナダから輸入した蟹の料理専門店、多少値段は高いがとてもおいしい。オーナーの岡田さんと話していると、この大連でも我が家からすぐ近くに接点があったのだと思ううれしくなり、それ以来日曜日にはこの店に行って食事したものだ。

夜は「川外川」という四川料理店で友人と食事をした。大連では有名な四川料理店で市内にいくつかこの店がある。当然辛い料理が多いが、とてもおいしい。大連の人は辛い料理がお好みようで、どこの四川料理店も人でいっぱいである。

#### ◆第4日目……3月9日(水)

今日は、シャングリラホテルの後に住んだラマダホテルに向った。ここには1年住んだ。1989年開業で、市内では老舗のホテルである。総経理は日本人で、なかなか素晴らしいホテルである。ホテルで1階の土産物店の店長と1年ぶりの対面。店長は50才くらいで、南方の有名な観光地・桂林の出身。人なつっこく明るい性格でいかに桂林がよい所かの話をよく聞かされた。そんないい所なのに何でこんなに遠くまで商売に来ているのだろうか。どこで勉強したのか日本語はとても達者である。

昼はこの建物の1階にある「太能」という韓国料理店でピビンバを食べる。窓外の喧騒を眺めながら食べていると大連はやはりいいなと思うのである。

午後は、ホテル近くの青泥窪橋(チンニーワーチャオ)のデパートやスーパー、DVDショップなどを見て回る。この地名はその昔、このあたりの土地が上質の青い泥を含んでいたことに由来する。青泥を取りすぎて、窪地になり、この名がついたとももの本には書いてあるが、今は市内で有数の繁華街となっている。

食事の話が続くが、夕食は少し中華料理から離れ、インド料理店に行った。昨年この店に案内してくれた友人とまたここで大好きなナンとチキンスープをオーダーする。我々の隣の席を見ると、ヨーロッパ人と覚しき男性が中国人と話している。結構流暢な中国語を話している。日本人や韓国人が中国語を話すのは違和感がないが、白人が話すともっとしっくり来ない。白人は世界中どこに行っても自国語と英語しか話さないものだと先入観があるからかも知れない。声をかけると相手もいろいろ話しかけて来る。聞けばイタリア人という。えーとイタリア語はどんなのがあったっけ?と頭脳を回転させても咄嗟には出て来ない。そうだ「さよなら」は「アリデベルチ」だったな、帰る時この言葉で別れようと思いつつ会話する。私から日本の監督にザッケローニにが来て日本のサッカーファンは喜んでいるよ、と少しお世辞も交えながら……。彼はよく仕事で大連に来るそうだ。この街に、ロシア人は比較的多いが、イタリア人と会ったのは今回が初めてであった。アリデベルチと言いながら店を後にした。

今日は9日なので9日の終りに9に因んで思い出したことを書いてみたい。

九(jiu)は中日辞典で調べると、4つの意味が出ている。①は数字の9。②は「数の多いことを表わす」とある。③は姓で、どうやら「九」という姓があるようだ。しかし未だにこの姓の人に出会ったことはない。そして④番目は、「冬至から81日間」。9日ずつ区切り、「一九」から「九九」までそれぞれの9日間を「九」と呼ぶとある。面白いではないか。中国各地どうなのか知らないが、大連では冬場に「三番目から四番目の九のあたりが一番寒い」と何度か聞いたことがある。冬至は12月22日頃だから、それに3×

9=27を加えた1月17日頃から4×9の26日頃が寒さの底ということになる。確かにその通りである。一体何処からこのような考え方が出てくるのであろうか。

#### ◆第5日目……3月10日(木)

昼は取引先の営業の中国人と2年ぶりに会うことができた。そして少し風変わりな店に案内してくれた。タクシーで大連商城というデパートのそばで下車。ここの6階にその店があると言う。一体どのような店だろうと考えていたら、大きな木材で門がつくられてある「王府」という店の前に来た。入り口にきらびやかな民族衣装を着た若い女性が立っている。ここは満族料理のレストランですと言う。270年の長きに渡って統治をした清朝をつくりあげた民族の料理である。店の奥に進むとヌルハチなのかこの店のオーナーのご先祖なのか分からないが祭壇がしつらえてあり、おごそかな雰囲気を出している。

さて、メニューを出されてもよく分からないので、一番満族料理らしいものを、と言うと出てきたのは「老太后飯包」であった。丸いレタスの中に団子状にしたごはんに特製のミソをつけ、他にいろいろ加えまくって手にもったまま食べる料理であった。おいしかったとだけ言おう。実際に食べてみないと分からないからだ。

午後は今回の旅行の宿泊とキップを手配して貰ったベストトラベル社の大連事務所に出向き、社長のソルさんと旧交を暖め、明日の旅順への車の手配をお願いした。

夕食は、前述した蟹漁師家でソルさんと営業部長と私の3人でゆったりした時間をすごした。この蟹漁師家といえば二胡と中国琵琶の演奏を紹介しなければならない。

二胡を弾くのは、牛麗麗さんという大連では有名な演奏家である。琵琶の人は時々交代するので名前は知らない。演奏は、毎晩7時から1時間で、日本の歌と中国の歌を交互に約10曲弾かれるのである。日本の歌は、「古城」とか「ふるさと」や「北国の春」など、否や応でも日本を思い起こさずにはいられない気持ちにされ、日本人客には特に評判なのである。一度牛さんの演奏会に出向いたが、大きな会場が、いっぱいなのには驚いた。二胡の音色には、中国人の魂を揺さぶるものがあるのであろうか。

#### ◆第6日目……3月11日(金)

ベストトラベル社の車で、運転手と日本語のできる中国人スタッフと私の3人で旅順に向った。友人が約70年前、旅順で住んでいた家がまだ残って



いるのでできたら写真を撮って来て欲しいと頼まれたからである。友人の生まれは大連である。グーグルの検索でまだ残っていることが分かったそうで、航空写真や当時の地図を見せて貰った。本人によれば、近代中国都市集成・1918年の地図に当時の家が掲載されているという。かれこれ築100年になる家である。この家に3才のころ住まわれていたそうだが、戦火を潜りぬけて、しっかり建っているその家を褒めてあげたい気持ちが起こり、私は写真を撮りに行こうと決意した。ただ中国海軍の管理下にある場所なので、くれぐれも無理はしないようにと心配頂いた。

1時間半後我々は現地にいる。番兵が1人立っており、遮断機が下りて中に入れない。そばの管理棟でこの責任者らしき人が坐ってじっとこちらを見ていた。ベストトラベルのスタッフと一緒に管理棟に行き、スタッフからよく説明させた。私からは、友人の依頼ではるばる日本から来たこと、写真を撮るだけなので許可して欲しいと言うとOKしてくれ、すぐ遮断機を上げてくれた。家は赤茶けたレンガ造りで、流石に時間の移ろいを感じさせたが、当時としてはかなり立派な家であったろう。周囲には、新しいマンションがすぐ近くまで迫っていた。10数枚撮ったあと、管理棟に戻りお礼を言いながら「近い将来取り壊す予定があるのか」と訊くと「将来のことは分からない」という答えが返ってきた。帰る時、番兵に写真を撮ってよいか尋ねると「否」であった。無理に撮って写真を没収されてもいけないので入り口付近の写真はやめにした。「再見」と言って別れたが、何とか友人のために歴史的な建物として残して欲しいと願った。

遅めの昼食後、ホテルで休息し、テレビを見てみると現地時間の3時頃(日本時間4時)であろうか? ニュースで日本で大地震が発生したことを報道しはじめた。そのうち大津波で家ごと流されている映像をくり返し流しはじめた。最初は信じられず映画の1シーンのような印象を受けた。そのうち震源は宮城県沖の海底であることが分り、ニュースのキャスターも真剣な顔つきで報道している様子を見るとこれは大変なことが起こったのだとショックをうけた。

東京の辺りはどうなのかすぐ心配になったが、日本のテレビのようにすぐ各地の震度を表示したりしない。携帯電話で自宅に電話したがつながらない。ホテルの部屋にいてもこれ以上の情報は入手できないので大連日通とも関わりの深いN保険会社へ電話した。ちょうど代表が席にいるとのことでそこにお邪魔した。当然地震のことはご存知で、インターネットで様子を見られていた。私も見せてもらい、状況が少しずつ分ってきた。その会社の電話を借りて自宅や家内の携帯などにも電話したが、やはりつながらない。明日の午後1時半の飛行機で日本に着くので、帰ってからのことだとハラをくくった。そのうちに上の娘から



築100年になる友人の旧家

「こちらは皆無事です」とメールが入ってきてやっと安心した。

#### ◆第7日目……3月12日(土)

朝7時のニュースを見ると新しい映像を加え、やはりくり返し大地震の惨状を流している。チェックアウトし、10時頃ベストトラベル社に行きソルさんに情報を求めた。

こうした状況下では、馴染みの旅行社が近くにあるのは本当に心強い。ソルさんは、「成田空港も被害にあったらしい。飛行機は大連にいつ来るかわからない。もう一泊していけば」と気楽に言う。最悪それしかないかと考えていると「午後4時過ぎに大連に到着するということが、まだ成田を飛び立っていない」との情報が入ってきた。出発時刻が大幅にズレ込むため、いつ頃空港に行けばよいかを聞いてもらおうと、「13時30分のフライトになっているので、13時までにカウンターで手続をしなければいけない」との回答であった。ということは空港内のレストランもない場所で3時間以上も1人で待たねばならないのかとガッカリしたが、日本に帰れるわけだからと気を取り直した。

空港に昼過ぎに到着し、出国手続きを済ませ搭乗口近くに腰を下ろした。登乗券を見せれば、お弁当を渡すとアナウンスがあったので、パサパサしたサンドイッチとバナナの買った弁当とペットボトルを受け取った。

飛行機は予定より少し早く3時半ころ無事着陸。搭乗客は窓から見える機影に安堵の表情だった。準備を急いだらしく、4時過ぎに離陸した。眼下に見える滑走路に「また来年来るよ」と別れを告げた。機内では朝6時のNHKニュースを流したので、よく事情が理解できた。

成田には19時20分ころ(日本時間)、少し早めに着いたが、機内で30分待たされようやく外に出られた。それから自宅までの難行苦行は敢えて記す必要はないだろう。結局3月13日午前1時すぎに自宅に着いた。

思い出多い旅行となった。(完)

# Devastating Calamity (大災害)

Gaspary Migwi Kiruthu ガスパレイ ミグィ キルス (アフリカンコネクション)

3月11日の震災で被災された全ての方に、先ずはお悔やみ申し上げます。被災地が1日も早く復興し、被災された方々が新しい生活を再建されますことを心より祈っております。

私たちはこの大災害が起こった時、何処でどのように過ごしていたか、これから先何度も思い出すことになるでしょう。この日のことは、誰もが鮮明に記憶し、いつまでも忘れずにいると思います。

晴れた金曜日のその日、私は仕事が休みでした。私が住んでいる橋本から1時間半離れた埼玉の自動車教習所で運転の教習を受けていました。2時46分、先生の横で私は運転の練習をしていました。車が激しく揺れ、先生は私が車の操作を誤ったと思ったように運転を代わろうとしました。しかし、前方にいたバスも激しく揺れていたため、すぐに地震だと気が付きました。こんな激しい揺れを感じたのは生まれて初めてのことでした。そしてその後、9時間掛けて家に帰ることになりました。

帰る途中、車の中でテレビのニュースを見、地震の規模と死者の数を知って自分の家族の安否が心配になりました。誰もがそうであったように、連絡を取ることが困難になっていました。私の場合は幸運なことに、ケニアに住んでいる両親、親戚の他、世界各地の友人たちが私たちの安全を確認する為に私の携帯電話に電話を掛けてくれました。しかし、私は私自身の家族との連絡が取れず心配していました。ケニアの両親は、国際回線使用の携帯電話で私の妻に電話を掛け安全を確かめると、その安全を又、私に伝えてくれました。私自身が直接、妻と連絡を取ることが出来ませんでした。妻の伝言を両親が電話で聞き、私に電話するという方法で家族の安全を伝えあうことが出来ました。私は更に、日本にいる友人や同僚の安全を確認したいと思い、ケニアに電話を掛けて電話番号を教え、その電話番号にケニアから電話をかけ、私に電話を掛け直し、伝言を伝えるという3方向からの立体的なコミュニケーションを利用しました。

この大震災は私に大自然の威力を見せ付けました。そのすさまじい破壊力の前に人間は為す術がありま

せんでした。自然には敬意を払うべき威力があることを知らせているかのようでした。

被災された日本人たちは、災害時には落ち着いて行動することや団体として行動することがどんなに大切なことであるかを世界中に伝えています。日本の行き届いた訓練や安全に対する取り組みは、これからも世界中に伝えられるでしょう。もし同じような災害が日本以外で起こったとしたら暴動や盗難など多くの問題が起きたかもしれません。

しかしながら、私は日本人たちの行動の中に反省すべきこともいろいろあることを自分の目で見ました。その日、電車などの公共機関が止まってしまったので、私は埼玉から橋本まで車で帰ってきました。車からは沢山の人が道路を歩いているのが見えました。その横を通り過ぎるのは1人か2人しか乗っていない車です。私が乗っていた車も8人乗りの車でしたが、2人しか乗っていませんでした。もし私の車があと6人乗せてあげたとすれば、僅かながらも彼らの助けになると思いました。しかし、私の考えは却下され、従うしかありませんでした。どうしても少しでも助け合おうとしなかったのでしょうか。

食べ物や日用品の扱いにも問題が広がっていました。もし皆がどうしても必要なものだけ最小限買えば、多くの人が必要とするものが無くなる事態は免れたと思います。残念ながら、自分中心に他の人の生活を顧みない人が沢山いたことも確かなことです。

テクノロジーが使えなくとも、生活は続けし、又続けなければなりません。日本人が昔からこれまでどのように生き延びてきたかを学びいい機会だと思います。例えば、川から安全な水を得る、料理をする火を得る、暖を取る薪を集めるなど。車の代わりに歩くこと。そしてなにより、近所の人たちと協力すること。情報を共有すること。私はこれらが困難を乗り越えていく一番の方法だと思います。関東でも今後いつか大きな地震が起こるなら、3月11日の震災での経験を生かすことが出来ると思えます。

私は、日本人は、元気を取り戻して一生懸命働き、困難を克服して復興出来ると確信しています。沢山

の人が私に訊きます。何故原発問題などの危機を避け安全を求めないのか？と。テレビなどで福島で起こった原発災害を見るたびに、ケニアの家族や親戚や友人から帰るように言われました。私の答えは、簡単です。日本は私にとって、第二の母国です。私がケニアから来たときから今までずっと温かく接してくれました。日本は、いつも私を励まし、最善を尽くすように勇気付けてくれました。大きくものを考えることを教えてくれました。

日本は今後、現在の厳しい状況から立ち直って行かなければいけません。私はこれまで粘り強く努力を続け様々な困難を乗り越えてきました。日本がよりよい将来を築こうとしている努力を私も共有したいと思っています。どうして今、日本を去ることが出来るでしょう？今こそ、日本が私を必要とし、私が出来ることをしたいと思っています。原子力発電所の問題があっても、私は逃げることよりここに住み、何かをしたいと決意しました。それは、第二の故郷、日本とした約束であり、それを裏切りたくないと思っていますのです。

### 茶館銀芽 (5月の開催日)

中国茶を通して知る中国文化。色々な中国名茶を楽しもう！  
<http://lasa-kikaku.cside.com/chakan-ginga.php>

- **5月の開催日：**  
 5月20日(金) 12:30～20:00/5月21日(土) 12:30～20:00/5月22日(日) 12:30～18:00  
 ※オーダーストップは、毎回、終了時間の30分前です。  
 ※2011年5月の茶館銀芽のお茶は：  
 明前竜井茶・竹翠(緑茶)、鉄観音・鳳凰単叢(青茶)、茉莉銀針 他 中国茶茶席：¥700～
- **2011年5月の茶館銀芽の催し(要予約)**  
 ◆中国茶講座(各回3～8名)  
 入門講座 5月20日(金) 18:30～20:00 ¥2000(お茶2種類代含む)  
 特別講座：¥3000  
 今回の茶6種を味わいながら、各茶の解説をします。  
 5月20日(金) 13:30～15:00  
 21日(土) 13:30～15:00
- **ゲストライブ(定員35名)**  
 5月22日(日) 13:30～ ¥2500(お茶代含む)  
 ◆特別ゲスト：古箏の姜小青さん

### 会場：山王オーディウム

☎ 03-3777-4681 (開催日のみ)  
 〒143-0023 東京都大田区山王1-14-7  
 JR京浜東北線「大森駅」山王北口より徒歩8分  
 (大森は東京駅から15分、横浜から22分)

### 松本杏花さんの俳句

### 「千里同風」より

#### 凋落にあらん限りの花吹雪く

qǐzhǐ shì diào luò  
 岂止是凋落  
 fēiwǔ huābàn hé qí duō  
 飞舞花瓣何其多  
 yóurú bàofēngxuě  
 犹如暴风雪



季语 櫻花凋落，春。在日本，花即櫻花。因花期短暫，雖然花謝，但仍指春季。

赏析 没亲临櫻花凋謝時的場面是想象不出那種淒切壯觀的。簇簇櫻花壓得枝頭顛顛悠悠，一陣風襲來，落英亂飛，絕不亞于“玉龍飛起三萬萬”之勢。無怪乎見人們此景常常感嘆生命的短暫，并被那瞬間的轟轟烈烈而感染。

#### 夜桜の戦くほどに蠢けり

yāoyě shù yè yīng  
 妖冶数夜樱  
 yī rú dǎzhàn qiǎo rú dòng  
 一如打颤悄蠕动  
 liàoqiào chūnhán lěng  
 料峭春寒冷

季语 夜櫻，春。

赏析 如果將白晝的櫻花比作清純淑女，那麼，夜晚的櫻花則如濃妝艷抹的貴婦人一樣妖冶。打光的色彩誇張了櫻花的綺麗，風吹樹搖，風情萬種！

此首俳句採用了擬人化的手法，更將夜櫻描寫得活靈活現，酣暢淋漓，令人賞心悅目，玩味無窮。

漢詩の美しい音声とリズムで漢詩を楽しむ 京劇俳優・殷秋瑞さんと読む・漢詩の会 そのⅢ

日本でよく知られている、五言絶句の短い漢詩を、

1節ずつ、繰り返し正しい発音で練習して音楽感覚で詠えるようにしよう！

中国語を学んでいらない方も、是非！詩吟のように漢詩の音とリズムを楽しめます

場所：まちだ中央公民館7F・音楽室Ⅱ

〒194-0013 原町田6-8-1・町田109/7 F JR横浜線町田駅・ルミネ口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分

2011年5月8日(日) 10:30～12:00

参加会費：1500円 定員：15名

お申込み&問合せ：☎050-1531-8622(有為楠)

E-mail:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp



殷秋瑞(いんしゅうずい)

中国戯曲大学卒業。顔全面に濃厚な隈取を施す豪傑役俳優。中国戯劇家協会会員/中国演出家協会会員/桜美林大学/多摩美術大学客員講師。

得意演目:「三国志」の曹操 張飛/「水滸伝」の魯智深/「霸王別姫」の霸王など。

又、NHKラジオの初級中国語講座やテレビの中国語講座でゲスト出演で多くの方に親しまれている。

【中国文化センターの催し・その一】

日本中国文化交流協会創立55周年記念

「写真で見る中日文化交流の55年」展

中日文化交流の歴史を振り返る写真約90点、及びその他資料(入場料：無料)

会場：東京中国文化センター(港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F)  
(日比谷線「神谷町」駅 4番出口より徒歩 約5分/銀座線「虎ノ門」駅 2番出口より徒歩 約7分)

2011年5月9日(月)～6月10日(金) (日/祝日を除く)  
10:30～17:30

【展覧会関連講演会】

5月18日(水) 16:00～17:30 於：東京中国文化センター

▲テーマ：「日中文化の差違と同一性」 入場無料

講師：辻井喬(詩人、作家、日本中国文化交流協会会長)

●講演会へのご参加は、下記へお問い合わせ下さい

☎03-6402-8168(東京中国文化センター)

主催：東京中国文化センター、日本中国文化交流協会

後援：中国文化部、日本外務省、中国大使館 他

【中国文化センターの催し・その二】

「2011年5～6月 中国映画上映会」

\*無料\*全席自由席\*定員：先着50名

\*各回11:00上映開始(10:30開場)

【お申込み方法】

申込者氏名/電話番号メールアドレス/鑑賞希望作品番号(A～G)/同伴者の人数を明記し、ccctok@hotmail.comに連絡し、当日、直接開場へお出で下さい。

A5月14日(土) 手機(携帯電話)(105分)(日本語)

B5月11日(土) お似合いカップル(113分)(簡・英)

C5月28日(土) ジャッキー・チェンを探して(84分)(簡・英)

D6月4日(土) 花の生涯-梅蘭芳(145分)(日本語)

E6月11日(土) 父と子の道(88分)(簡)

F6月18日(土)11:00～12:25 私たち(85分)(日本語)

G6月25日(土)11:00～12:50 クラッシュランディング(110分)(簡)

※カッコ内は字幕の言語です。簡/英は、簡体字及び英語の略です。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

【5月の定例会と6月号の発送日】

◆定例会:5月10日(火)10:00～(三輪センター・第五会議室)

\*参加前にお問い合わせ下さい。

◆5月号おたより発送:5月28日(土)14:00～  
(麻生市民館・大会議室)

【今年も楽しもう！麻生サークル祭】

麻生市民館利用団体が、麻生市民館全館を使っていろいろ楽しい催しを開催します。基本的にすべての催しが無料の、内容の濃い催しばかりです。

～ お揃いでお楽しみください ～

2011年5月28日(土)・29日(日)

於：麻生市民館

小田急線新百合ヶ丘駅北口徒歩2分

▲詳細は、同封のプログラムをご覧ください。わんりいの催しは、11ページに掲載しました。

主催：麻生市民館サークル連絡会

問合せ：麻生市民館 ☎044-951-1300